

## フィンランド語

坂田 晴奈

## 0. フィンランド語の概要

本稿では、フィンランド語の連用修飾に関して、コンサルタントから得た例文を分析する。その前段階として、本節ではフィンランド語について概要を示す。概要は、Hakulinen 他(2004), Karlsson(1999), 松村(1992), 荻島(1992)を基にまとめる。なお、本稿で扱うフィンランド語は、首都ヘルシンキを中心に話されている共通語である。

## 0.1. 系統と類型

フィンランド語はウラル語族、フィン・ウゴル語派、バルト・フィン諸語に属する膠着語である。基本語順はSVOで、修飾部先行型である。前置詞・後置詞ともに使用されるが、後置詞の方が数が多い。

## 0.2. 表記

本稿での表記は、全て正書法に基づく。フィンランド語の正書法はIPAの表記とほぼ同じであるが、aは[a], äは[æ], öは[ø], nkは[ŋ]の発音である。形態のみ示す際、後述する母音調和により接辞等に異形態が存在する場合、aまたはäならばA, oまたはöならばO, uまたはyならばUと表記する。

## 0.3. 音声・音韻

フィンランド語の母音音素は、a, e, i, o, u, y, ä, öの8つである。母音調和があり、前母音のä, ö, yと後母音のa, o, uは同一形態素内に共起しえない。残りの中立母音と言われるi, eはどちらの母音とも共起できる。全ての母音に長短の区別がある。

子音は、p, (b), t, d, k, (g), m, n, ŋ, (f), s, (š), h, l, r, v, jである。( )内の音声は外来語のみに見られる音素である。ŋは短音の場合、後続するkと共にnkと表記され、長音の場合は後続するgと共にngと表記される。p, (b), t, k, (g), m, n, ŋ, s, l, rには、長短の区別がある。

## 0.4. 形態

## 0.4.1. 名詞

名詞の格は15種類である。

**表 1 一般名詞の格変化 (talo 「家」 を例として)**

格の名称	単数形	複数形	意味
主格 (nominative)	talo	talo-t	「家(が)」
属格 (genitive)	talo-n	talo-j-en	「家の」
分格 (partitive)	talo-a	talo-j-a	「家(を)」
対格 (accusative)	talo-n	talo-t	「家を」
様格 (essive)	talo-na	talo-i-na	「家として」
変格 (translative)	talo-ksi	talo-i-ksi	「家になる」
内格 (inessive)	talo-ssa	talo-i-ssa	「家の中で」
出格 (elative)	talo-sta	talo-i-sta	「家の中から」
入格 (illative)	talo-on	talo-i-hin	「家の中へ」
接格 (adessive)	talo-lla	talo-i-lla	「家(の表面)で」
奪格 (ablativ)	talo-lta	talo-i-lta	「家(の表面)から」
向格 (allative)	talo-lle	talo-i-lle	「家(の表面)へ」
欠格 (abessive)	talo-tta	talo-i-tta	「家なしで」
共格 (comitative)	talo-i-ne		「家とともに」
具格 (instructive)	talo-i-n		「家によって」

(Hakulinen 他(2004): 108) を基に筆者作成)

共格と具格は、単複共通の形態である。対格固有の形式は、人称代名詞と疑問代名詞 *kuka* 「誰」にのみ現れる。それ以外の語の場合、単数形ならば属格と同形で、複数形ならば主格と同形である。対格と分格は主に直接目的語に付属する格であり、以下のような使い分けがある。

- ①肯定文における直接目的語ならば対格、否定文における直接目的語ならば分格
- ②行為（現象）が完結（完了）していれば対格、完結（完了）していなければ分格
- ③行為（現象）が、直接目的語の表す対象の全体に及ぶものであれば対格、そうでなければ分格

## 0.4.2. 動詞

### 0.4.2.1. 定形動詞

動詞は人称（単数、複数の 1～3 人称の他に受動形という不定人称形がある）、時制（現在、過去、現在完了、過去完了）、法（直説法、条件法、可能法、命令法）によって語形変化する。4つの時制が区別されるのは直説法のみで、他の法では現在と過去の区別がされるのみである。動詞は、語幹（過去標識）-（法標識）-人称接辞のように活用するが、直説法以外の法におい

ては過去標識はつかず，動詞 olla 「ある，いる」を用いて分析的に表される．以下の表 2 と表 3 で，puhua 「話す」を例に，動詞の活用パターンをまとめる．直説法以外の法については現在形のみ示す．

表 2 動詞の活用（人称と時制）

	現在	過去	現在完了	過去完了
1 人称単数	puhu-n	puhu-i-n	ole-n puhu-nut	ol-i-n puhu-nut
2 人称単数	puhu-t	puhu-i-t	ole-t puhu-nut	ol-i-t puhu-nut
3 人称単数	puhu-u	puhu-i	on puhu-nut	ol-i puhu-nut
1 人称複数	puhu-mme	puhu-i-mme	ole-mme puhu-neet	ol-i-mme puhu-neet
2 人称複数	puhu-tte	puhu-i-tte	ole-tte puhu-neet	ol-i-tte puhu-neet
3 人称複数	puhu-vat	puhu-i-vat	ovat puhu-neet	ol-i-vat puhu-neet
受動形	puhu-ta-an	puhu-tt-i-in	on puhu-ttu	ol-i puhu-ttu

(松村 (1992: 677) を基に筆者作成)

表 3 動詞の活用（法）

	条件法	可能法	命令法
1 人称単数	puhu-isi-n	puhu-ne-n	φ
2 人称単数	puhu-isi-t	puhu-ne-t	puhu
3 人称単数	puhu-isi	puhu-ne-e	puhu-koon
1 人称複数	puhu-isi-mme	puhu-ne-mme	puhu-kaa-mme
2 人称複数	puhu-isi-tte	puhu-ne-tte	puhu-kaa
3 人称複数	puhu-isi-vat	puhu-ne-vat	puhu-koot
受動形	puhu-tta-isi-in	puhu-tta-ne-en	puhu-tta-koon

(松村 (1992: 677) を基に筆者作成)

フィンランド語には，否定を表す否定動詞という形式が人称活用する．肯定文において主動詞に付属していた人称接辞は否定動詞につき，主動詞は人称接辞を欠いた形式になる．

- 1) E-n                    puhu        japani-a.  
 NEG.V-1SG        speak:PR    Japanese-PAR  
 「私は日本語を話さない。」

(作例)

過去形や完了形が否定文に含まれる場合、主動詞は NUT 分詞（過去分詞）の形になる。完了形の場合は、助動詞の olla 「ある、いる」も分詞形になる。以下の 2)は過去形、3)は現在完了形の否定文である。

- 2) Olli ei käyttä-nyt tietokone-tta.  
 Olli.NOM NEG.V.3SG use-NUTP computer-PAR  
 「Olli はコンピュータを使わなかった。」

(作例)

- 3) Olli ei ol-lut käyttä-nyt tietokone-tta.  
 Olli.NOM NEG.V.3SG be-NUTP use-NUTP computer-PAR  
 「Olli はコンピュータを使ったことがない。」

(作例)

#### 0.4.2.2. 非定形動詞

フィンランド語には、10 種の不定詞と 5 種の分詞がある。不定詞の標識自体は 3 種であるが、その標識に格接辞が後続するので、形式としては 10 種の不定詞があると、先行研究ではみなされている。以下に、puhua 「話す」を例に、不定詞と分詞の一覧を示す。

表 4 不定詞一覧

形式	具体例	基本的な意味	
A 不定詞 (第 1 不定詞)	基本形	puhua	「話す (こと)」
	変格形	puhuakseen	「話すために」
E 不定詞 (第 2 不定詞)	内格形	puhuessa	「話す時」
	具格形	puhuen	「話しながら」
MA 不定詞 (第 3 不定詞)	内格形	puhumassa	「話している」
	出格形	puhumasta	「話す (ことについて etc.)」
	入格形	puhumaan	「話す (ことに対して etc.)」
	接格形	puhumalla	「話すことで」
	欠格形	puhumatta	「話さずに」
	具格形	puhuman	「話すはずである」

表5 分詞一覧

形式	具体例
VA 分詞 (能動現在分詞)	puhuva
NUT 分詞 (能動過去分詞)	puhunut
TAVA 分詞 (受動現在分詞)	puhuttava
TU 分詞 (受動過去分詞)	puhuttu
動作主分詞	puhuma

## 0.4.2.2.1. 不定詞

不定詞は大きく分けると A 不定詞 (第 1 不定詞), E 不定詞 (第 2 不定詞), MA 不定詞 (第 3 不定詞) の 3 形式である。古い先行研究では第 1, 第 2, 第 3 のように呼ばれていたが, 現在は形態による名称が主流になっている。本節では, 今回の調査結果に関わる A 不定詞基本形, A 不定詞変格形, E 不定詞内格形, E 不定詞具格形, MA 不定詞内格形, MA 不定詞入格形について概観する。

A 不定詞の標識である -A には, 動詞のタイプによって -dA, -tA, -lA, -rA, -nA といった異形態がある。

A 不定詞基本形は, 辞書の見出しとなる形式である。A 不定詞基本形には様々な用法があるが, 英語の to 不定詞に当たる機能を果たすことが多い。

- 4) Ol-i virhe muutta-a maa-lle.  
 be-PST.3SG fault:NOM move-AINF country-ALL  
 「田舎に移ったのは間違いだった。」

(Hakulinen 他(2004: 491))

- 5) Korti-t ovat helppo-j-a käsitel-lä.  
 card-PL be:PR.3PL easy-PL-PAR treat-AINF  
 「カードは扱うのが簡単だ。」

(Hakulinen 他(2004: 491))

A 不定詞変格形は主語の人称に一致した所有接辞が必ず付く。A 不定詞変格形は目的を表す構文としての用法が最も多いが, 副詞的要素として機能することもある。

- 6) Ihminen syö elä-ä-kse-en.  
 human:NOM eat:PR.3SG live-AINF-TRA-POSS.3

「人間は生きるために食べる。」

(Karlsson(1999: 184))

- 7) Tode-n sano-a-kse-ni e-n oikein pidä si-itä.  
truth-GEN say-AINF-TRA-POSS.1SG NEG.V-1SG right like:PR it-ELA  
「実を言うと、私はそれがとても嫌いだ。」

(Hakulinen 他(2004:491))

E 不定詞の形態は -e である。

E 不定詞内格形は、時を表す時相構文という構造において用いられる。属格名詞や人称接辞により主語を標示する場合がある。

- 8) Aja-e-ssa-si sinu-n pitä-ä ol-la varovainen.  
drive-EINF-INE-POSS.2SG PRO.2SG-GEN must:PR-3SG be-AINF careful  
「あなたは運転する時、注意しなければいけない。」

(Karlsson(1999: 187))

E 不定詞具格形は様態を表すが、格式ばった表現に用いられることが多く、E 不定詞内格形より頻度は低い。

- 9) Lapsi tul-i itki-e-n koti-in.  
child:NOM come-PST.3SG cry-EINF-INS home-ILL  
「子供が泣きながら家に帰ってきた。」

(Karlsson(1999: 188))

MA 不定詞の標識は -mA である。MA 不定詞には人称接辞が付かない。

MA 不定詞内格形は、定形動詞に従属した形式として用いられることが多い。

- 10) Pistäydy-i-n katso-ma-ssa posti-a.  
drop.in-PST-1SG look-MAINF-INE post-PAR  
「私は郵便を見に立ち寄った。」

(Hakulinen(2004: 491))

MA 不定詞入格形も定形動詞に従属することが多いが、形容詞に後続する場合もある。

- 11) Tul-kaa            syö-mä-än        iltapala-a.  
 come-IMP.2PL    eat-MAINF-ILL    supper-PAR  
 「夕食を食べに来てください。」

(Hakulinen(2004: 492))

- 12) Ole-t-ko            valmis        lähte-mä-än        mukaan?  
 be:PR-2SG-QP    readyleave-MAINF-ILL    together  
 「君は一緒に出かける準備ができたか。」

(Hakulinen(2004: 492))

#### 0.4.2.2.2. 分詞

分詞は、0.4.2.2.の表5に示した通り、VA分詞（能動現在分詞）、NUT分詞（能動過去分詞）、TAVA分詞（受動現在分詞）、TU分詞（受動過去分詞）、動作主分詞の5種である。（ ）内の名称は、あくまで通言語的な名称で、フィンランド語学で主に用いられるのは標識による名称である。今回の調査で現れた分詞は、NUT分詞、TU分詞、動作主分詞である。NUT分詞は、先述したように動詞の完了形として用いられることが多い。形容詞的な用法もあるが、今回の調査では形容詞的用法の例が得られなかったため、詳しい説明は割愛する。本節ではTU分詞と動作主分詞についてのみ概観する。

TU分詞は、受動態の完了形に用いられるのが最も多い用法だが、分格接辞を伴うことがある。この時、TU分詞が形成する構文は「～した後」という時に関する構文として機能する。さらに、TU分詞の分格形には所有接辞が後続することがある。

- 13) Jo-i-n            kahvi-a            soite-ttu-a-ni            Liisa-lle.  
 drink-PST-1SG    coffee-PAR        call-TUP-PAR-POSS.1SG    Liisa-ALL  
 「私は Liisa に電話をした後コーヒーを飲んだ。」

(作例)

動作主分詞は、形容詞と同様に名詞を修飾する。動作主分詞は書き言葉でしか使われない。動作主分詞を用いた節は、joka, mikä（英語の who, which に相当）などで始まる関係節に相当するものである。ほとんどの場合これらの節は前置修飾要素となり、動作主は属格名詞あるいは人稱接辞で表される。

- 14) Sinu-n            täyty-y            täyttä-ä        kerran        teke-mä-si            lupaus.  
 PRO.2SG-GEN    must:PR-3SG    fill-AINF    once        make-AP-POSS.2SG    promise:NOM  
 「(君は) 一度した約束は守らなければならない。」

(荻島(1992: 139))

## 1. コンサルタント情報

コンサルタントは以下の1名である。

氏名: Sinikka Kurosawa (シニッカ・黒澤)  
性別: 女性  
生年月日: 1964年8月21日  
出身地: フィンランド・ピュフター (Finland, Pyhtää)  
母語: フィンランド語ヘルシンキ方言  
備考: 日本に20年以上在住 (配偶者は日本人)

媒介言語は基本的に日本語である。例文を提示していただく際は、日本語文を示しながらその文が表す状況を説明して調査した。媒介言語の影響が全くないとは言えないが、日本語のみ提示するよりは影響が少ないと考える。

## 2. 連用修飾的複文に関する調査結果

この節では調査の結果を示す。グロスに関しては Hakulinen 他(2004)の術語を参考にした。

グロス中のフィンランド語の英語訳はインターネット上の辞書 "EUDict" (<http://eudict.com/>) のフィンランド語・英語辞書を参照した。例文中で重要な要素には下線を引いて示す。

### 2.1. 同時動作

(1) 彼はいつも新聞を読みながらご飯を食べる。

a. Hän                    syö                    aina                    ruoka-a                    luki-e-ssa-an  
PRO.3SG.NOM    eat:PR.3SG                    always                    food-PAR    read-EINF-INE-POSS.3SG  
sanomalehte-ä.  
newspaper-PAR

b. Hän                    syö                    aina                    ruoka-a                    luki-e-n                    sanomalehte-ä.  
PRO.3SG.NOM    eat:PR.3SG                    always                    food-PAR    read-EINF-INS                    newspaper-PAR

(1a)はコンサルタントが提示した文、(1b)は筆者が提示した文である。

非限界的なアスペクトを持つ2つの動詞が同時に行われる場合、フィンランド語ではE不定詞が用いられる。(1a)はE不定詞内格形で、「～する時」を意味する時相構文を形成する。(1b)はE不定詞具格形で、「～ながら」のような様態を表す。意味から考えると、(1b)のみが適切に思われたが、コンサルタントによれば、(1a)の不定詞でも「読みながら」という意味が表せるという。(1a)と(1b)にどのような違いがあるか尋ねたが、「ニュアンスは違うように思うがどう違

うかわからない」ということであった。

(1a)の E 不定詞内格形には主語を表す所有接辞がつくことが可能である。(1)における主節と不定詞節の主語は同じであるが、以下のように、異主語の場合でも表現が可能である。

(1a') 彼が新聞を読んでいる時、私はご飯を食べていた。

Sö-i-n	ruoka-a	<u>häne-n</u>	<u>luki-e-ssa-an</u>	sanomalehte-ä.
eat-PST-1SG	food-PAR	PRO.3SG-GEN	read-EINF-INE-POSS.3SG	newspaper-PAR

## 2.2. 継起的動作・物語的連鎖

(2) (私は) 昨日は 10 時に家に帰って、少しテレビを見て (から)、寝ました。

Eilen	<u>palas-i-n</u>	koti-in	klo	10,	<u>katso-i-n</u>
yesterday	return-PST-1SG	home-ILL	clock 10	watch-PST-1SG	
vähän	TV:-tä <sup>1</sup>	<u>ja men-i-n</u>	nukku-ma-an.		
a.little	TV-PAR	and go-PST-1SG	sleep-MAINF-ILL		

日本語における「～して、～して、～した」のように、動作が複数連続して起こる場合、準動詞のような非定形動詞を使うことはできず、定形動詞を連続させ、接続詞でつなぐという形を取る。欧米の多くの印欧語によくある構文である。

## 2.3. 継起：理由

(3) (私は) 昨日階段で転んで、ケガをしてしまった。

- a. Eilen kaatu-e-ssa-ni porta-i-ssa minu-un sattu-i.  
yesterday fall-EINF-INE-POSS.1SG step-PL-INE PRO.1SG-ILL happen-PST.3SG
- b. Eilen kaatu-e-ssa-ni porta-i-ssa loukkas-i-n  
yesterday fall-EINF-INE-POSS.1SG step-PL-INE hurt-PST-1SG  
itse-ä-ni.  
oneself-PAR-POSS.1SG

(3a)と(3b)は、「ケガをする」という表現に差があるだけで、「転んで」という動作を表すのはともに E 不定詞内格形である。これは(1)で見られた不定詞である。直訳すると「私は階段で転んだ時にケガをした」という、時相構文と同様の解釈になるが、理由を表す時にも E 不定詞内格形を用いるという。

<sup>1</sup> TV の直後にあるコロンは、頭字語と格接辞が連続する場合に表記されるものである。これは正書法にしたがっている。

## 2.4. 異主語

- (4) 今日も父は会社に行って、兄は大学に行った。

Tänään-kin isä-ni men-i tö-i-hin, ja  
today-PC father:NOM-POSS.1SG go-PST.3SG work-PL-ILL and  
velje-ni men-i yliopisto-on.  
brother:NOM-POSS.1SG go-PST.3SG university-ILL

異主語の動作に切り替わる時は、(2)と同様、定形動詞の後に接続詞が現れる。日本語のテ形のような特別な形式は存在しない。

## 2.5. 付帯状況

- (5) (あの人は) 今日帽をかぶって歩いていた。

Tänään hän kävel-i hattu pää-ssä.  
today PRO.3SG.NOM walk-PST.3SG hat:NOM head-INE

結果状態の残った状況で別の動作行為が行われる場合、E 不定詞具格形が用いられることもある。ただし、(5)のように「帽子をかぶる」という場合は、英語の“a hat on the head”のように、名詞のみで表現する。本稿の趣旨からはそれるが、フィンランド語では“a hat in the head”のような言い回しをするのが、英語とも異なっていて特徴的である。

## 2.6. 並行動作

- (6) (私は) 休みの日はいつも本を読んだり、テレビを見たりしています。

Lue-n vapaapäivä-nä aina kirjo-j-a tai katso-n TV:-tä.  
read:PR-1SG holiday-ESS always book-PL-PAR or watch:PR-1SG TV-PAR

日本語では「タリ」によって列挙される行為は、フィンランド語の場合は定形動詞と接続詞で表される。(2)の時系列における動作では接続詞ja「そして」が用いられるが、(6)の場合はtai「または」という接続詞が用いられる。

## 2.7. 理由・カラ

- (7) 時間がないから、急いで行こう。

Mei-llä ei ole aika-a, joten men-nä-än nopeasti.  
PRO.1PL-ADE NEG.3SG be:PR time-PAR thus go-PASS-3SG quickly

日本語における、理由を表す「カラ」に相当するフィンランド語は、接続詞 joten 「だから」である。日本語には「カラ」と「ノデ」の違いが見られるが、フィンランド語においてはそのような違いは見られない。

## 2.8. 理由・ノデ

(8) 昨日は頭が痛かったので、いつもより早く寝ました。

Eilen	minu-lla	ol-i	päänsärky-ä,	<u>joten</u>	men-i-n
yesterday	PRO.1SG-ADE	be-PST.3SG	headache-PAR	thus	go-PST-1SG
nukku-ma-an	tavallis-ta	aikaisemmin.			
sleep-MAINF-ILL	ordinary-PAR	earlier			

2.7 で述べたように、日本語における「カラ」と「ノデ」のような違いはない。

## 2.9. 趨向／移動の目的

(9) あの人は本を買いに行った。

Hän	men-i	<u>osta-ma-an</u>	kirja-n.
PRO.3SG.NOM	go-PST.3SG	buy-MAINF-ILL	book-ACC

「～しに行く」という移動の目的を表す場合は、MA 不定詞入格形を用いる。上記の文における「行く」という動詞 *meni* (原形は *mennä*) など、多くの動詞については、後に続く移動の目的は MA 不定詞入格形で表されるが、以下のように、「一時的に訪れる」というニュアンスを持つ *käydä* が主動詞である場合、移動の目的は MA 不定詞内格形になる。これは、*käydä* が取る項の格形が内格と決まっているからである。

(9') あの人は本を買いに行ってきた。

Hän	käv-i	<u>osta-ma-ssa</u>	kirja-n.
PRO.3SG.NOM	go-PST.3SG	buy-MAINF-INE	book-ACC

なお、「～しに行く」という表現において、たとえその行為が実現していない段階であっても、仮定的表現に用いられる条件法は使えない。

## 2.10. 目的・意図

(10) (彼は) 外が良く見えるように窓を開けた。

a.	Hän	avas-i	ikkuna-n	<u>niin, että vo-isi</u>	<u>näh-dä</u>
	PRO.3SG.NOM	open-PST.3SG	window-ACC	so that can-COND.3SG	see-AINF
	paremmin	ulos.			
	better	out			

b.	Hän	avas-i	ikkuna-n,	<u>että näk-isi</u>	paremmin	ulos.
	PRO.3SG.NOM	open-PST.3SG	window-ACC	that see-COND.3SG	better	out

目的を表す場合、動詞は条件法で現れる。これは、「外が良く見える」という状態がまだ実現していないからである。フィンランド語の条件法は、英語の条件法とほぼ同様の用法を持ち、反実仮想なども表す。(10a)の *niin että* は英語の *so that* にあたる表現である。*niin* は“*Vai niin!*”, “*Niinkö?*”など、「あら、そうなの!」という驚きの意味を込めた相槌としても用いられる。(10b)のように *niin* がない場合もあるが、ニュアンスの違いは特にないという。

## 2.11. 恒常的条件

(11) ここでは夏になると、よく雨が降ります。

Kun	kesä	tule-e,	niin	täällä	sata-a	usein	vettä.
when	summer:NOM	come:PR-3SG	so	here	rain:PR-3SG	often	water:PAR

恒常的条件を表す場合、「～の時」という意味の *kun* を用いた節が現れる。以降の(12), (13)においても *kun* 節が用いられる。つまり、恒常的条件と確定条件は同じ構造で表される。

## 2.12. 確定条件・生起

(12) 窓を開けると、冷たい風が入って来た。

Kun	avas-i-n	ikkuna-n,	kylmä	tuuli	tul-i
when	open-PST-1SG	window-ACC	cold	wind :NOM	come-PST.3SG

sisään.  
in

## 2.13. 確定条件・発見

(13) 坂を上ると、海が見えた。

Kun	nous-i	ylämäke-ä,	niin	näk-i	mere-lle.
when	rise-PST.3SG	uphill-PAR	so	see-PST.3SG	sea-ALL

(11), (12)と同様に *kun* 節が用いられるが、発見を表す(13)には(10)でも現れた *niin* が用いられている。

## 2.14. 仮定条件

(14) 明日雨が降ったら、私はそこに行かない。

Jos	huomenna	sata-a	vettä,	en	mene sinne.
if	tomorrow	rain:PR-3SG	water:PAR	NEG.1SG	go:PR there

仮定条件には、英語の *if* にあたる *jos* を用いた節が現れる。確定条件を表す *kun* 節とは明ら

かに用法の違いが見られる。

### 2.15. 反実仮想

(15) もっと早く起きればよかったなあ。

Ol-isi-n-pa	herän-nyt	aikaisemmin.
be-COND-1SG-PC	wake.up-NUTP	earlier

反実仮想の場合、条件法過去形<sup>2</sup>が用いられる。最初のコピュラ動詞 *olisinpa* には、*-pa* という小詞がついている。これは、日本語の「ヨ」、「ネ」、「ナ」などの終助詞に相当する機能を持ち、この例では後悔の念を表している。

### 2.16. 反実仮想・前件否定

(16) あんなどころに行かなければよかった。

Sellaise-en	paikka-an	ei	ol-isi	kannatta-nut	men-nä.
such-ILL	place-ILL	NEG.3SG	be-COND	be.profitable-NUTP	go-AINF

(15)と同じく、前件否定の反実仮想においても条件法過去形が用いられる。ここで助動詞のように使われている動詞 *kannattaa* は、「～する価値がある」という意味を持つ。よって直訳すると「あんなどころに行く価値はなかつただろう」となる。

### 2.17. 一般的真理

(17) 1に1を足せば、2になる。

a.	Yksi	plus	yksi	on	kaksi.	
	one:NOM	plus	one:NOM	be:PR.3SG	two:NOM	
b.	Kun	yhte-en	lisä-ä	yhde-n,	niin saa	kaksi.
	when	one-ILL	add:PR-3SG	one-ACC	so get:PR.3SG	two:NOM

日本語では「バ」という条件形式が用いられる場合、フィンランド語では(17a)のように数式のような表現になるか、(17b)のように直説法が用いられる。

### 2.18. 仮定条件+働きかけのモダリティ

(18) 駅に着いたら電話をしてください。

a.	Soita	<u>kun</u>	ole-t	saapu-nut	asema-lle.
	call:IMP.2SG	when be:PR-2SG	arrive-NUTP	station-ALL	

<sup>2</sup> 概要で示した通り、条件法過去形は助動詞 *olla* 「ある、いる」と *NUT* 分詞で分析的に表される。

- b. Soita saavu-ttu-a-si asema-lle.  
 call:IMP.2SG arrive-TUP-PAR-POSS.2SG station-ALL

仮定条件であっても、「駅に着いたら」のような、実現可能性が高い場合には直説法が用いられる。(18b)のように、TU 分詞の分格形が用いられることもある<sup>3</sup>。(18a)との使用頻度やニュアンスの差は特にないという。

## 2.19. 仮定条件+願望

(19) 日曜日になったら、みんなで公園に行きたいなあ。

Sunnuntai-na halua-isi-n men-nä yhdessä puisto-on.  
 Sunday-ESS want-COND-1SG go-AINF together park-ILL

願望を表す場合は「望む」という意味を持つ動詞 *haluta* (原形) が助動詞として用いられる。さらに、*haluta* が条件法になると、丁寧あるいは婉曲的なニュアンスを帯びる。

## 2.20. 心配

(20) 明日雨が降ったら困るなあ。

Jos huomenna sata-a vettä, on kurja-a.  
 if tomorrow rain:PR-3SG water:PAR be:PR.3SG terrible-PAR

心配を表す特別な形式はなく、(14)のように英語の *if* 節にあたる表現を用いる。「雨が降る」という動詞は直説法である。

## 2.21. 時間的前後関係に則していないナラ条件文

(21) 家に来るなら、電話をしてから来てください。

- a. Jos tule-t koti-i-ni, tule sitten kun soita-t.  
 if come:PR-2SG home-ILL-POSS.1SG come:IMP.2SG then when call:PR-2SG
- b. Jos tule-t koti-i-ni, niin soita ennen kuin  
 if come:PR-2SG home-ILL-POSS.1SG so call:IMP.2SG before as  
 tule-t.  
 come:PR-2SG
- c. Jos tule-t koti-i-ni, tule soite-ttu-a-si.  
 if come:PR-2SG home-ILL-POSS.1SG come:IMP.2SG call-TUP-PAR-POSS.2SG

<sup>3</sup> TU 分詞については、0.4.2.2.2.を参照されたい。

「電話をしてから来てください」の部分それぞれの文で直訳すると、(21a)は「電話をした後に来てください」、(21b)は「来る前に電話をしてください」、(21c)は「電話をした後に来てください」となる。(21a)は時を表す *sitten kun* 「～した後」という表現、(21b)は *ennen kuin* 「～する前」という表現で、いずれも非常に頻度が高い熟語である。(21c)は(18b)と同じく TU 分詞(受動過去分詞)の分格形が現れている。3つの文におけるニュアンスの違いはほとんどないという。

## 2.22. 予想を伴った条件文

(22) [もうすぐベルが鳴るので] 鳴ったら、教えてください。

Ilmoita	<u>kun</u>	se	soi.
tell:IMP.2SG	when	it:NOM	ring:PR.3SG

「ベルが鳴る」ことがほぼ確実であると想定されている場合、英語で *when* が用いられるように、フィンランド語でも時を表す *kun* 節が用いられる。

## 2.23. 予想を伴わない条件文

(23) [もしかしたらベルが鳴るかもしれないので] もし鳴ったら、教えてください。

Ilmoita	<u>jos</u>	se	soi.
tell:IMP.2SG	if	it:NOM	ring:PR.3SG

「ベルが鳴る」ことがもしあれば、というニュアンスを与える場合、英語で *if* が用いられるように、フィンランド語でも *if* に相当する *jos* を冠した節が用いられる。

## 2.24. 相関構文

(24) 働かざるもの食うべからず。 / 働かない者は、食べるべきではない。

- |    |         |         |          |       |        |         |                           |
|----|---------|---------|----------|-------|--------|---------|---------------------------|
| a. | Joka    | ei      | työ-tä   | tee,  | se-n   | ei      | <u>syö-mä-n-kään</u>      |
|    | REL:NOM | NEG.3SG | work-PAR | do:PR | it-GEN | NEG.3SG | eat-AP-ACC-PC             |
|    |         |         | pidä.    |       |        |         |                           |
|    |         |         | hold:PR  |       |        |         |                           |
| b. | Joka    | ei      | työ-tä   | tee,  | se-n   | ei      | <u>tule _____ syö-dä.</u> |
|    | REL:NOM | NEG.3SG | work-PAR | do:PR | it-GEN | NEG.3SG | come:PR eat-AINF          |

「～すると…だ」のように、従属節と主節に相関のある構文は、英語では関係詞 *what* などを用いて表される。フィンランド語においても、同様の構造が見られた。

「働かない者」に相当するのは冒頭にある関係詞 *joka* を用いた節で、英語の *which* や *who* を用いた節に似た用法を持つ。フィンランド語では、人物・事物の別に関わらず *joka* が用いられ

る。(24a)は「食べる」という動作が動作主分詞になっている。この動作主分詞は格接辞を伴って名詞的な働きをすることもあり、この場合は対格形で「食べるためのものを」という意味になる。

(24b)は「来る」という意味の動詞 *tulla* が助動詞として用いられ、「食べる」に相当する A 不定詞基本形の *syödä* が後続している。この場合は「食べる必要がない」という意味である。いずれの文においても、人物を表す指示代名詞 *se* が属格形になっている。

## 2.25. 言いさし・願望

(25) もう少しお金があったらなあ。

Ol-isi	hyvä,	jos	ol-isi	vähän	enemmän	raha-a.
be-COND.3SG	good	if	be-COND.3SG	a.little	more	money-PAR

願望のニュアンスを含む言いさしの場合、主節も従属節も条件法が用いられる。非実現性を含意している。(25)は主語を明示していない場合で、主語を明示するならば以下ようになる。主語がある場合は、所有文という構造になる。所有文は、「所有者-接格+olla「ある、いる」+被所有者-主格」という、英語などにはない構造である。

(25') (私に) もう少しお金があったらなあ。

Ol-isi	hyvä,	jos	minu-lla	ol-isi	vähän	enemmän
be-COND.3SG	good	if	PRO.1SG-ADE	be-COND.3SG	a.little	more
	raha-a.					
	money-PAR					

## 2.26. 言いさし・提案

(26) これも食べたら？

- a. Syö-t-kö            tämä-n-kin?  
eat:PR-2SG-QP    this-ACC-PC
- b. Syö                tämä-kin.  
eat:IMP.2SG      this:NOM-PC

(26a)は直説法現在形で、単に質問する形式である。(26b)は命令形で、(26a)より強い勧めを表す。(26b)において、直接目的語が主格になるのはフィンランド語の命令文の特徴である。

## 2.27. 言いさし・つき放し

(27) やりたいなら (自分の) 好きなようにやれば？

Jos halua-t teh-dä, niin tee se niin kuin halua-t.  
 if want:PR-2SG do-AINF so do:IMP:2SG it:NOM so as want:PR-2SG

「突き放し」のニュアンスを表す特別な形式は存在しない。日本語では「やれば？」のように疑問形になっているが、フィンランド語では命令形が用いられる。

## 2.28. 仮定的な逆接

(28) このコップは落としても割れない。

a. Tämä lasi ei menerikki jos se-n pudotta-a.  
 this:NOM glass:NOM NEG.3SG go:PRbroken if it-ACC let.fall:PR-3SG

b. Vaikka tämä-n lasi-n pudotta-a, se ei menerikki.  
 although this-ACC glass-ACC let.fall:PR-3SG it:NOM NEG.3SG go:PRbroken

(28a)では英語の if にあたる jos が用いられている。この文のみ提示すると「このコップを落としたら割れない＝落とさなければ割れる」という解釈も可能であるが、特に違和感を感じる文ではなく、元の日本語の意味で解釈されるという。(28b)では逆接を表す接続詞 vaikka が冒頭に現れている。語順の違いはあるが、ニュアンスの違いは特にならない。

## 2.29. アクチュアルな逆接

(29) このリンゴは高かったのに、ちっとも甘くない。

a. Tämä omena oli kallis mutta se ei  
 this:NOM apple:NOM be-PST.3SG expensive but it:NOM NEG.3SG  
 ole makea-a lainkaan.  
 be:PR sweet-PAR at.all

b. Tämä omena ei ole makea-a lainkaan, vaikka se  
 this:NOM apple:NOM NEG.3SG be:PR sweet-PAR at.all although it:NOM  
 oli kallis.  
 be-PST.3SG expensive

c. Vaikka tämä omena oli kallis, se ei  
 although this:NOM apple:NOM be-PST.3SG expensive it:NOM NEG.3SG  
 ole ollenkaan makea.  
 be:PR at.all sweet

d.	Tämä	omena	ei	ole	makea-a	lainkaan,
	this:NOM	apple:NOM	NEG.3SG	be:PR	sweet-PAR	at.all
	<u>ol-la-kse-en</u>		kallis.			
	be-AINF-TRA-POSS.3SG		expensive			

(29a)は逆接を表す接続詞 *mutta* が用いられるという最も単純な構造である。(29b)は逆接を表す節が後半にあり、接続詞 *vaikka* が現れている。(29c)は(29b)と節の順序が逆になっているだけである。(29d)以外の3つの文は、定形動詞のみが現れているが、(29d)はA不定詞変格形が現れている。このA不定詞変格形は、本来目的などを表すのに用いられるが、逆説的な内容を表す場合でも用いられる。4つの文には使用頻度やニュアンスの差はほとんどないという。

### 2.30. 逆接3

(30) 彼の家に行ってみたけれども、彼はいなかった。

Käv-i-n	häne-n	kotona-an,	<u>mutta</u>	hän	ei
visit-PST-1SG	PRO.3SG-GEN	home:INE-POSS.3SG	but	PRO.3SG:NOM	NEG.3SG
ol-lut	kotona.				
be-NUTP	home:INE				

異主語の逆接の場合でも、定形動詞が用いられる。A不定詞変格形はコンピュータ動詞 *olla* においては現れうるが、*olla* 以外の動詞がA不定詞変格形として現れることはないようである。

### 2.31. 時間的期限[1]

(31) あの人が来るまで、私はここで待っています。

a.	Odota-n	täällä	<u>ennen kuin</u>	hän	tule-e.
	wait:PR-1SG	here	before as	PRO.3SG:NOM	come:PR-3SG
b.	Odota-n	täällä	<u>kunnes</u>	hän	tule-e.
	wait:PR-1SG	here	until	PRO.3SG:NOM	come:PR-3SG

(31a)では「～する前に」という意味の *ennen kuin* が用いられているが、(31b)では「～まで」という意味の *kunnes* が用いられている。ニュアンスには特に差がないという。文中の主語が同じである場合も、同様の構造を取ることができる。

### 2.32. 時間的期限[2]

(32) あの人が来るまでに、食事を作っておきますよ。

Tee-n	ruoa-n	<u>ennen</u>	<u>kuin</u>	hän	tule-e.
do:PR-1SG	food-ACC	before	as	PRO.3SG:NOM	come:PR-3SG

これまでの例にもあった **ennen kuin** 「～する前に」 が用いられる。なお、文中の主語が同じである場合も、同様の構造を取ることができる。

## 略号一覧

グロスに関しては基本的に Hakulinen 他(2004)の術語とその日本語訳に従う（日本語訳は筆者による）。日本語における（ ）内の表記はその他の文献等での呼称である。

	英語	フィンランド語	日本語
-			形態素境界
./:			形態素内の意味境界
1	1 <sup>st</sup> person	1. persoona	1 人称
2	2 <sup>nd</sup> person	2. persoona	2 人称
3	3 <sup>rd</sup> person	3. persoona	3 人称
ACC	accusative	akkusatiivi	対格
ADE	adessive	adessiivi	接格
AINF	A-infinitive	A-infinitiivi	A 不定詞（第 1 不定詞）
ALL	allative	allatiivi 向格	
AP	agent participle	agenttipartiisiippi	動作主分詞
COND	conditional	konditionaali	条件法
EINF	E-infinitive	E-infinitiivi	E 不定詞（第 2 不定詞）
ESS	essive	essiivi	様格
GEN	genitive	genetiivi	属格
ILL	illative	illatiivi	入格
IMP	imperative	imperatiivi	命令
INE	inessive	inessiivi	内格
MAINF	MA-infinitive	MA-infinitiivi	MA 不定詞（第 3 不定詞）
NEG	negative	negatiivi	否定
NOM	nominative	nominatiivi	主格
NUTP	NUT-participle	NUT-partisiippi	NUT 分詞（能動過去分詞）
PAR	partitive	partitiivi	分格
PASS	passive	passiivi	受動
PC	particle	partikkeli 小詞[疑問小詞以外]	
PL	plural	monikko	複数
POSS	possesive	possessiivi	所有接辞
PR	present	preesens	現在
PRO	pronoun	pronomini	代名詞
QP	question particle	kysymyspartikkeli	疑問小辞
REL	relative	relatiivi	関係詞
SG	singular	yksikkö	単数
TRA	translative	translatiivi	変格
TUP	TU-participle	TU-partisiippi	TU 分詞（受動過去分詞）

参考文献

- Hakulinen, Auli, Maria Vilkuna, Riitta Korhonen, Vesa Koivisto, Tarja Riitta Heinonen, Irja Alho (2004)  
*Iso suomen kielioppi*. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
- Karlsson, Fred (1999) *Finnish: an essential grammar*. London: Routledge.
- 松村一登 (1992) 「フィンランド語」(亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典第3巻 世界言語編』: 673-688) 東京:三省堂.
- 荻島崇 (1992) 『基礎フィンランド語文法』 東京:大学書林.

参考資料

EUdict <http://eudict.com/>